

遺残胎盤からの出血に対するUAE後、骨壊死を来した1例

水沼仁孝(那須赤十字病院放射線診断科)

- 既往歴:32歳-ウイルス動脈輪閉塞症。初回妊娠。切迫早産のため入院.11日目帝王切開.その11日後、下腹部痛。MR:少量腹水貯留。その3日後、炎症反応高値。CT:子宮体部後壁左側の遺残胎盤、同部から腹腔内出血持続、下腹部に被包化液体貯留/膿瘍形成。経皮的腹腔内ドレナージ後、左子宮動脈塞栓術施行。動脈硬化激しく遠位へのカニューレーション不能、閉鎖動脈を自己血栓にて塞栓後、子宮動脈起始部よりゼラチンスポンジ細片にて塞栓、但し完全塞栓得られず。翌日、膣上部切断術+卵管全摘施行。10カ月後、脳出血にて脳外科入院。腰痛を訴えたため、腰椎MR施行、その時、左仙腸関節を挟み骨壊死が判明、左腸腰動脈領域。左坐骨、寛骨臼にも同じ変化。IVR中、子宮動脈起始部で同時に描出されたのは上殿動脈であったが、その領域に塞栓後変化は無し。腰痛はTh12のSchmol結節由来でその後、消失。通常、骨には神経分布なく、壊死しても疼痛は訴えないとのこと。